

ある日

—行為の中にある真実を考える—

津守 真

一、

朝、保育の現場に出てゆく前のひととき、私は静かな時を持ちたいと思っている。一日、私はヨハネ福音書の最初の一節、「はじめにことばあり……」を読んだ。前田護郎訳のその個処の注に、「ナザレのイエスこそ神からつかわされた真のことば——その来臨によって神と人とを、また、人と人とを対話させて結ぶもの——とヨハネはいう」と記されていた。ことばは、話される言語を指すだけでなく、ひとつの生涯の全体を、とくに行為の底にある人間の真実を指しているのではないかと思う。

このようなことを朝のひととき考えて保育の現場に出た。そうすると、たちどころに、私を必要とする子どもに出会い、それに応答して一日は過ぎる。子どもは毎日を真剣に生

きているので、それに応答する行為はどこかで人間の真実に結ばれている。その一日は雑多な行為の集積でなく、それらを貫いている真実の秩序がある。保育の具体的な時の移行きは、滑らかな流れではなく、磨擦と抵抗の厚みのある瞬間の連続である。

二、

この日、朝、いちばんに、前号までに記してきたK男が門から入ってきた。いそがしくなりそうに思えたので、他の子どもたちがくる前に、K男としっかりとき合いたいと思って過した。そのうちにK男は私を保育室の中に押しこんで庭に出てゆき、もどってこなかった。自分ですることをしっかりと見つけるようになるのに、これまでの長い経過があるが、この一日は、すでにそのような歩みを踏み出したこの子どもとの応答である。

室内には、登校途中の乳母車の中で眠ってしまったA子がふとんの上にいるだけである。一歳になる前に脳腫瘍の手術をし、昨年から歩きはじめるようになったこの子どもは、お姫さまのように皆に可愛がられる一方、ときによって、赤ちゃんを羨む子どもたちに関心をもたれるので、眠っているときにも大人は目を離せない。

窓から外を見ると、H子がひとりであらいたらいいの中で水遊びをしていたので、保育室の戸をしめ、出入口に気を配りながら、しばらくH子の水とつき合った。ひととき沈黙のやりとりの後、H子は校医さんのおいていってくれたプラスチック製の注射器の水鉄砲で水を上手にとばすようになる。上に向かって水をとばし、「お空」と何度もいう。小柄な身体の割

に体重のあるこの子どもは、意外に、空と水のイメージに生きていたのではないかと思う。ブランコにのるときも、たくさんこいで欲しがらる。トランポリンも思うようにとべないのだが、手をとってたくさんとぶようにしてもらいたがる。私も気持の重い日に、ふと見上げた空が特別の意味をもつことがある。可愛いがられて育ったこの子どもも、養護学校に通う程の障害を負っていることを思うと、私共には分らない身体的不快感があるかもしれないし、社会的なひけ目を感じることもあるだろう。

今朝も、元気にとびはねていたひとりの子どもが、突然床に崩折れて発作を起した。手を握っていると、発作の波が高まり、そしておさまってゆくのがわかる。じきに唇の色も元通り紅色になるのだが、私共には分らない不快感があるだろう。身体的にも社会的にも重さをもった子どもたちである。それだけ軽さへの憧憬も、人知れず抱いているのではなからうか。空に向ける眼、流れゆく水への関心。

こうしている間にも、H子のわきを、何人もの子どもやおとなが通り、近寄り、過ぎ去る。H子はそのたびに、注射器の水鉄砲を人に向ける。個人と内部のイメージと共に、他人に対するイメージと関心がある。だれの中にも両方があり、両方を表現できる人は健全なのだろうと思う。

H子の水とつきあっている間に、何人もの子どもが保育室に出入し、私はそのたびに、子どもによっては大急ぎで部屋にとんでゆく。私は眠っているA子のことを気にしてそこに行くのだが、実際には何も起らない。部屋に入ってゆく子どもは室内を歩きまわった

り、トランポリンをとんでは出てゆく。

三、

K男が保育室に入っていったので私はあとからおくれて部屋にいった。

K男はA子のふとんに一緒に横になり、A子の顔をのぞきこんで笑い、A子の手を優しくとって動かしている。こういう光景を見られるのは保育者の幸いである。いままでだったら、他の子どもが近寄っただけでK男はその場を立ち去ったのに、きょうはA子に親しみを寄せている。ふたりの様子が可愛らしいので、私は「いまにK男くんと妹のM子ちゃんと、それからA子ちゃんと手をつないで、ナショナルスーパーにいったアイスクリームたべるんだね」とお話しをすると、K男はケラケラ笑って、A子の手にさわる。そして、もっとその話をしてくれと私を促す。私は同じような話を何度もくり返し、K男は、「A子ちゃんとM子ちゃんと」というところで笑ってA子の顔をのぞきこむ。そんな日がいつくるのだろうかと思いつつ、いまは五、六歩しか歩けないA子のそのときの姿を、ふと思ひ浮かべてしまう。

四、

まもなくA子は目を覚まし、お弁当にする。いま、A子は食物を机の上にいっぱいひろげ、それを両手で口にいられてたべるので、それをする事ができるように、まわりをとと

のえるのにいそがしい。身体と感覚が大きな位置を占めているA子の生活にとっては、食べるたのしみは大きいと思う。まだ、両手で食べ物をつかんで自分の口にいれることによって、食べているのは自分であるという自我の感覚がたしかめられていると思うので、あたりを汚すけれども、このことはさせてやりたい。

食事が終わるとすぐにA子のははって玩具棚にゆき、籠をひきずりおろしてあそびはじめる。他の子どもが床にこぼした水をふいたり、あそんでいるA子の食事の洋服を着かえさせ、おむつをかえ、周囲の子どもたちの遊びの相手をしながら、A子に新しい服をきせなどしているうちに、時間はバタバタとすぎて帰りの時間になってしまう。その中のひとつひとつの行為には、考えると面白いことがいくつもあるのだが、そのときは印象にとどめるだけで、どの子どもたちも満足してあそべるように、いそがしく立ちはたらくことで一杯である。まわりの子どもたちがみんな心ゆくまで何かをしているので、私にはそれが快い。

迎えにきた母親たちとことばをかわす。

五、

これはある日の保育の実際である。

具体的な内容は毎日違う。日によってはまるで違う。同じところで保育をしていても、人によって体験は異なる。まして違う幼稚園、学校で仕事をしていれば、具体的な生活の内

容はそれぞれ違うだろう。だが、子どもと生活を共にする保育の生活には、どれにも共通なことがあるのではないかと思う。それは何なのだろうか。

保育の生活は本を読む生活とは異なる。自分の興味を追って調べものをする学者の生活ではない。自分が計画したことを実行に移してゆく生活でもない。

それは、自分とは違う人間である子どもの要求に応答する生活である。よく見て理解し、判断し、行為する生活である。身体を動かす生活である。想像力をはたらかす生活である。これらのことは、どのような場であろうと、保育する人に共通のことである。

更にまた、それはいろいろの子どもや大人に気を配る生活である。ほとんどとりとめないことをしながら、その結果、大人も子どもも自己を実現するのを助ける。その中で生きる私にとっても、その一日は人生の貴重なひとコマである。

子どもと一緒に過ぎて後、あれこれと考える生活であることも、保育者に共通である。考えの結論はえられないままに次の日をむかえる。そしてまた具体的な子どもとの生活の中に投げこまれる。毎日の保育の実際は具体的な行為から成り立っているので雑然としているように見えるが、その底に人間の真実がある。それを明瞭にしてゆくところに、保育の学問の重要な課題があるのではないかと思う。

(愛育養護学校)